

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 12 日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26381199

研究課題名(和文) 学習者の教室内英語使用促進のための「教室内英語力評価尺度」の開発と活用

研究課題名(英文) The development and utilization of an English-language proficiency benchmark for the promotion of in-classroom English usage

研究代表者

中田 賀之 (Yoshiyuki, Nakata)

同志社大学・グローバル・コミュニケーション学部・教授

研究者番号：40280101

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本科研プロジェクトにおいては、教室内における生徒の英語使用の促進を目指している日本人英語教師(主に中学校および高等学校)のために、量的及び質的検証を通して、学習者の教室内英語使用を促進するための「教室内英語力評価尺度」の開発を行った。さらに、教師の自己研修や教員研修などにおける尺度の活用方法についての提案も行った。

研究成果の概要(英文)：In this research project, we developed an English-language proficiency benchmark for use in the EFL classroom. The target of the benchmark was Japanese secondary school teachers who aim to promote their students' use of English in the language classroom. Assessment was conducted through the use of both quantitative and qualitative measures. Furthermore, we suggested ways of utilizing this benchmark for teachers' professional development or teacher-training purposes.

研究分野：動機付け、自己調整学習、オートノミー、教室内英語

キーワード：教室内英語 教員養成 教師教育

1. 研究開始当初の背景

中田科研（平成 22～24 年度）では、香港で利用されている LPATE（英語教師言語能力評価）を参照し、教室内教師英語評価尺度として、「総合診断尺度（Integrated Diagnostic Scale）」と「内省分析尺度（Reflective Analytic Scales）」及び下位尺度の「機能別尺度（Function-specific Scales）」と「タスク別尺度（Task-specific Scales）」を開発した（中田ら、2013）。機能別尺度では、教師発話の持つ言語機能のうち、誘出（Elicitation）、促進（Facilitation）、明確化（Clarification Request）、修正（Recast）、意見（Comment）、評価（Assessment）の側面を具体的な段階記述に基づいて尺度化している。一方でタスク別尺度では、教科書本文のオーラル・サマリーや発問による内容理解確認、ターゲット文の導入など、教室内で教師が行う個別の言語タスクに焦点をあてている。こうした尺度を活用することで、教師の言語の質についてより深い観察または内省による分析を行うことが可能となり、生徒の言語使用につながっているかという観点から教師英語の改善を行う上で助けとなることを意図している。

しかし、学習者の英語使用の更なる促進に寄与するためには、教師の教室内英語力の把握にとどまらず、学習者の教室内英語の実態を把握することが肝要である。つまり、作成した尺度自体の教師による広範囲な使用を支援し、そこから得られる情報を元に尺度を継続的に改善する一方、**学習者が使用する教室内英語**自体を評価する尺度の開発が求められる。このような尺度は、教師にとっては「学習者の英語使用をどのように伸ばすべきか」を考える際により具体的な材料を提供してくれ、学習者にとっても自身の教室内英語（「何が、どの程度できているか」）についてのメタ認知能力を伸ばすことを支援してくれる道具となり得るため、結果と

して学習者の教室内英語使用の更なる促進につながると考えられる。そこで、中田科研（平成 26～29 年度）では、教師の英語使用により引き出される生徒英語の見取りを可能とするため、主に教師英語力評価尺度の機能別尺度の項目に対応した「教室内生徒英語力評価尺度」の開発を行った。

2. 研究の目的

本研究は、英語教師が英語での授業の改善を目的として学習者の教室内英語使用促進のために活用できる、「**学習者の教室内英語評価尺度**」、これを有効に活用するための「**学習者と教師の教室内英語力向上の手引き**」の開発を目指す、共同研究である。具体的には以下を明らかにすることを目的としている。

- (1) 綿密な「目標作業分析(target task analysis)」や概念化に基づき、「学習者の教室内英語力」の構成概念を網羅的かつ具体的に定義する
- (2) 関連の行動目標の習得状況を評価・測定するための尺度(能力記述文)を開発する
- (3) 「学習者の教室内英語力」の習得を支援するための具体的手立てを考案する
- (4) 教師用に開発中の4つの尺度の精緻化と妥当性検証を進める
- (5) 既存の教師の教室内後評価尺度および学習者の教室内尺度を効率的かつ統合的に使用できる、教員の校内および自主研修にも活用できるような手引きを作成する

3. 研究の方法

本研究は、以下のようなステップを基本として行われた。

- (1) 学習者用尺度の理論的基盤の確立と教師用尺度の課題の検討
- (2) 学習者用教室内英語力の評価尺度の素案作成
- (3) 統合的診断尺度と内省的分析尺度の

継続的使用および機能別尺度とタスク別尺度の精緻化

- (4) 香港現地調査
- (5) 5種類の尺度の統合的な活用方法についての原案作成
- (6) 尺度の精度の量的および質的検証
- (7) 尺度およびその活用方法最終案作成

① 研究会合

年に3～5回程度の分担者会議または全体会議を、主に兵庫教育大学神戸ハーバーランドキャンパスにおいて開催した。非遠隔のためメール上でのやり取りを含めるとかなりの回数を重ねたことになるため、詳細は割愛することとする。

② データ収集協力校及びフィードバック

データ収集協力校（鳥取西高校、鳥取東高校、国際情報高校、香住丘高校、福岡高校、姫路西高校、今治西高校、愛媛大付属高校）にて生徒の言語使用についての質問紙調査のためのデータ収集を行い、いずれの学校へも直接及びメールにて調査結果の報告し、フィードバックを行なった。

② 香港視察調査

平成27年度に香港大学を訪問し、Dr. Simon Chan (University of Hong Kong) 氏の他、Dr. Clairline Chan (Hong Kong Institute of Education) を訪問し、香港の教室内英語評価尺度(CLA)やその活用、CLAを使用してのHigh stakeholderからの評価と統合的診断尺度を使用してのProfessional developmentを目的とした活用の違いに焦点をあて意見交換を行った。具体的には、いくつかの日本人英語教師による英語での授業の10本のDVDを見て、2人に香港の英語評価尺度CLAに基づいて評価を行ってもらい、その評価の理由について議論を行った。さらに、中学校2年に相当するPENTECOSTAL SCHOOLのMs. Wong Po Yin の授業を観察し、意見交換を行っ

た。

4. 研究成果

上述の研究目的(2)～(4)を達成すべく、本科研の研究成果は以下の論文・科研報告書、口頭発表・シンポジウムなど様々な形で公開され、最終的には研究目的(5)に当たる、既存の教師の教室内後評価尺度および学習者の教室内尺度を効率的かつ統合的に使用できる、教員の校内および自主研修にも活用できるような手引きを作成した。このような尺度は、教師にとっては「学習者の英語使用をどのように伸ばすべきか」を考える際のより具体的な材料を提供してくれ、学習者にとっても自身の教室内英語（「何が、どの程度できているか」）についてのメタ認知能力を伸ばすことを支援してくれる道具となり得るため、結果として学習者の教室内英語使用の更なる促進につながると考えられる。

- (1) 池野修・中田賀之・木村裕三・長沼君主 (2016) 「教室内英語タスク別評価尺度」の開発-「音読指導」と「新出文法の口頭導入」を例に- 『大学英語教育学会中国・四国支部紀要』第13号, pp. 171-183.

本研究は、英語教師に求められる英語力について、「タスク」（＝英語授業において教師が英語を用いて行うことが期待されている活動、英語教師にとってのreal-world tasks）という評価単位で可視化し、英語力評価ルーブリックである「教室内英語タスク別評価尺度」を提案したものである。10つのターゲット・タスクの中から特に「音読指導」と「新出文法の口頭導入」を例として取り上げ、これらの活動における言語使用を、(i) 英語の質、(ii) 語りの工夫、(iii) 学習者を意識した言語使用の3観点から、4つのレベル（未適格／適格＝ベンチマーク・レベル／優良／熟達）に分けて記述した。本論文では、「タスク別評価尺度」の理念と特徴について詳説し、その具体的な活用方法についても提案を行なっている。

- (2) Kimura, Y., Nakata, Y., Ikeno, O., Naganuma, N., & Andrews, S. (2017). Developing classroom language assessment benchmarks for Japanese teachers of English as a foreign language. *Language Testing in Asia*, 7:3. DOI: 10.1186/s40468-017-0035-2

The present case study examines the ideal assessor conditions after thorough review on assessor bias from the language testing/assessment research, while the development of assessment benchmarks for use in Japan is discussed based on a high-stakes benchmark assessment for teachers of EFL in Hong Kong. The proposed benchmarks acknowledge the complexity of classroom English use, thus employing four different scale types to accommodate the multifaceted characteristics of teacher language proficiency. The current case study concludes with the exploration of tasks remaining for the future development of our benchmark assessments for use in ongoing professional development.

- (3) *KELES Journal* 3 特別企画『「生徒の言語使用につながる英語授業」を考える』

生徒の英語使用につながる英語授業の在りようについて、様々な角度から光を当てて、理論および実践例を紹介している特集号。中田賀之・池野修・木村裕三・長沼君主が寄稿。

- (4) 中田賀之・池野修・木村裕三・長沼君主 (2018) 科研報告書「教室内生徒英語力評価尺度活用マニュアル」

(pp. 1-38)

この報告書には、第二言語習得理論に基づき生徒の言語使用について論じた「理論セクション」と教師の自己研修や教員研修における尺度の活用方法について論じた「教師マニュアル・セクション」に分かれている。

- (5) 教室内教師・生徒英語 Can-Do 尺度の活用マニュアル

教師の英語使用により引き出される生徒英語の見取りを可能とするため、主に全科研で開発された教師英語力評価尺度の機能別尺度の項目に対応した「教室内生徒英語力評価尺度」の開発を行った。教室内生徒英語力評価尺度の活用においては、教室内教師英語力評価尺度とともに用いることが推奨される。教室内の生徒の英語使用及び教師の英語使用の評価を通して、「英語による英語の授業」を改善し、生徒及び教師の英語使用の質を高めることが目的となる。一連の尺度を用いた授業改善の実施にあたっては、例えば、以下のいくつかの段階が考えられるだろう。それぞれの実施段階は個別に行うことも可能であるが、ステップを踏んで実施することでより効果的となる。教室内生徒英語および新たに開発された教師英語尺度を統合的に活用するためのフローチャートは以下にまとめることができる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計7件)

- ① 池野 修 (2018) 「生徒の英語使用の中身とそれを促す指導の工夫」 *KELES Journal*, 査読無, 3, 6-11. (課題番号 26381199 の記載あり)
- ② 中田 賀之 (2018) 「生徒の主体的な言語使用の意味するもの 第二言語習得からの一考察」 *KELES Journal*, 査読無, 3, 12-15. (課題番号 26381199 の記載あり)
- ③ 木村 裕三 (2018) 「生徒の主体的な言語使用につながる英語授業 質的データ分析から見えてきた本質と課題」 *KELES Journal*, 査読無, 3, 21-28. (課題番号 26381199 の記載あり)
- ④ 長沼 君主 (2018) 「生徒の言語使用につながる英語授業を支援する教室内生徒英語 Can-Do 尺度の活用」 *KELES*

Journal, 査読無, 3, 29-35. (課題番号 26381199 の記載あり)

- ⑤ 中田賀之・池野修・木村裕三・長沼君主 (2018) 科研報告書「教室内生徒英語力評価尺度活用マニュアル」査読無, (pp. 1-38) (科研費の研究種目および研究課題名の記載あり)

- ⑥ Kimura, Y., Nakata, Y., Ikeno, O., Naganuma, N., & Andrews, S. (2017). *Developing classroom language assessment benchmarks for Japanese teachers of English as a foreign language. Language Testing in Asia*, 査読有, 7:3. DOI: 10.1186/s40468-017-0035-2 (課題番号 26381199 の記載あり)

- ⑦ 池野修・中田賀之・木村裕三・長沼君主 (2016) 「教室内英語タスク別評価尺度」の開発-「音読指導」と「新出文法の口頭導入」を例に-『大学英語教育学会中国・四国支部紀要』 査読有, 第 13 号, pp. 171-183. (課題番号 26381199 の記載あり)

[学会発表] (計7件)

1. 2017年8月 池野修・中田賀之・木村裕三・長沼君主 (・興津紀子・稲岡章代) (該当発表各 4 件)

『「生徒の言語使用につながる英語授業」を考える：実践と課題』
全国英語教育学会第 43 回島根研究大会
「課題別研究フォーラム」

2. 2016年8月 中田賀之・池野修・長沼君主 (・興津紀子) (該当発表各 3 件)

『「生徒の言語使用につながる英語授業」を考える』
全国英語教育学会第 42 回埼玉研究大会
「課題別研究フォーラム」

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中田 賀之 (NAKATA, Yoshiyuki)
同志社大学・グローバルコミュニケーション学部・教授
研究者番号：40280101

(2) 研究分担者

池野修 (IKENO, Osamu)
愛媛大学・教育学部・教授
研究者番号：70294775

木村裕三 (KIMURA, Yuzo)
富山大学・大学院医学薬学部研究部
(医学)・教授
研究者番号：803045559

長沼君主 (NAGANUMA, Naoyuki)
東海大学・公立私立大学の部局等・
教授
研究者番号：720365836

(4) 研究協力者

アンドリュース・ステイファン
(ANDREWS, Stephen) (元香港大学教
授)

河野極 (KOUNO, Kiwame)

小笠原良浩 (OGASAHARA,
Yoshihiro)

棟安都代子 (MUNEYASU, Toyoko)

村上ひろこ (MURAKAMI, Hiroko)

徳山美穂 (TOKUYAMA, Miho)

永末温子 (NAGASUE, Atsuko)